

「東アジアにおけるポストコロニアリズム」研究会

# 植民地主義と分断の狭間で沈められた声を聴く

## —日本軍性奴隷制と裴奉奇の告発

朴金 優綺

### はじめに

日本社会では2015年12月の日本・韓国の外相間「合意」<sup>2</sup>による影響などにより、日本軍性奴隷制<sup>1</sup>問題は「解決済み」<sup>3</sup>の問題あるいは「日韓間の政治的・外交的な問題」といった認識が広く共有されているとみられる。しかし、サバイバーらが長年にわたって正義を求め、その声を受けて国連の各種人権条約機関や特別報告者などが同問題の解決を日本政府に対して繰り返し求めていることに象徴されるように<sup>4</sup>、同問題は「解決済み」の問題ではなく、日本政府が人権の国際基準に基づく真実、正義、賠償、再発防止の保証などの措置<sup>5</sup>を怠っているために、サバイバーの人権が現在も救済されず侵害され続けている「現在進行形」の問題である。そうした意味で日本軍性奴隷制問題は日本の継続する植民地主義<sup>6</sup>の問題であると位置付けられる。

在日朝鮮人の若者世代は2015年から毎年「日本軍性奴隷制の否定を許さない4.23アクション」（以下「4.23アクション」という。）を開催し、日本軍性奴隷制の歴史を否定する動きに反対し、日本軍性奴隷制問題の克服と朝鮮半島の統一を目指す社会運動を構築している<sup>7</sup>。

4.23アクションは、1977年に裴奉奇<sup>8</sup>がサバイバーとして初めて実名と顔を明かし<sup>9</sup>被害を告発した証言が『朝鮮新報』に掲載された日である4月23日を記念して開催されている。これは1991年8月14日に実名と顔を明かして名乗り出た金学順<sup>10</sup>の告発が日本軍性奴隷制問題について語られる際にはほぼ必ず重要な契機として言及される一方、金学順に先立つ裴奉奇の告発は見過ごされている状況に疑問を投げかけ、裴奉奇が社会一般に認識されない背景にある日本の継続する植民地主義、朝鮮半島の南北分断、米国の軍事主義、沖縄への構造的暴力などの構造的な問題の克服を目指す積極的な行動提起であった<sup>10</sup>。

本稿では、4.23アクションの「前史」としての裴奉奇と金賢玉の出会い、金賢玉が語った裴奉奇の変化、日韓両国における裴奉奇への認識の広がりとその「忘却」

ないし「消去」の状況について整理し、そこから見えてくる日本軍性奴隷制問題に関する言説における裴奉奇の告発の位相について分析することを目的とする。

## 1. 裴奉奇と金賢玉の出会い

裴奉奇は1914年、朝鮮半島南部の忠清南道ちゅうけいなんどうに生まれた。日本帝国主義による朝鮮植民地支配下で生活は非常に貧しく、数え6歳で母親と離別し、数え7歳の頃から何度も他人の家に奉公に出され、数度の結婚生活も破綻した。1943年に朝鮮半島北部の咸鏡道へんきやうどう・興南ふんなむで出会った「女紹介人」の「仕事せんで金儲かるところがある」「口を開けて寝ていたら、バナナが落ちて口に入る」などの甘言によって釜山・下関・那覇・渡嘉敷島へと連行され、他の6人の朝鮮人女性とともに赤い瓦屋根の「慰安所」で「アキコ」という日本名を強制されながら日本軍の「慰安婦」として被害を受けた。1945年3月の慶良間諸島への米軍上陸後は日本軍の炊事班として働かされ、飢えに苦しみながら命からがら戦禍を生き延びた<sup>11</sup>。

1945年8月の日本軍の武装解除後には米軍の捕虜となるも収容所から逃亡し、小さな風呂敷包みと地下足袋一足のみを手には沖縄中を一人放浪した。知人もなく言葉も通じず生活費もない中、飲み屋を転々としながら酔客相手に性を売らざるを得ず、子守りや野菜売り、空き瓶集めなどして日銭を稼いだ<sup>12</sup>。

1972年5月に沖縄の施政権が日本に返還された際、以後3年以内に1945年8月15日までに渡日した事実を証明して日本政府から「特別在留」許可を得なければ「不法残留」者として韓国へ強制送還されるという話を聞いた裴奉奇は、かつて働いていた小料理屋の店主に身元引受人になってくれるよう依頼し、同店主は承諾した<sup>13</sup>。こうして裴奉奇是那覇入国管理事務所に対して日本軍「慰安婦」として戦時中に受けた自身の被害を証言せざるを得ず、これによって法務省の「特別在留」許可を受け、その旨が同年10月22日付の『高知新聞』<sup>14</sup>などを通じて報道された。



図1 『高知新聞』1975年10月22日付

金賢玉は1942年に兵庫県に生まれ、神戸朝鮮中高級学校卒業後に在日本朝鮮人総聯合会（以下、総聯）の青年組織である在日本朝鮮青年同盟で活動した。その後朝鮮大学校への進学・卒業を経て神戸朝鮮中高級学校で教員を務めた後、在日本朝鮮女性同盟の活動家を経て、1972年9月6日に結成された総聯沖縄県本部の専従活動家として、同年に婚姻した夫・金洙燮と他3名の専従活動家らとともに沖縄に赴任した<sup>15</sup>。

金賢玉らの活動は同年8月15日から行われた「第二次戦時沖縄朝鮮人強制連行虐殺調査団」<sup>16</sup>による沖縄戦における朝鮮人の被害実態の調査活動への協力に始まり、本土での在日朝鮮人社会及び在日朝鮮人運動から切り離されていた沖縄の朝鮮人同胞を探し訪ねる活動、在沖縄朝鮮人の生活と権利を守り朝鮮の自主的平和統一と東アジアの平和を目的とする沖縄の米軍基地反対行動や金武湾における石油備蓄基地建設阻止運動への連帯行動などの活動を主に行った<sup>17</sup>。そうした活動の中で1975年10月頃、先述した同月の『高知新聞』などの記事を配信した共同通信社の記者が、当時総聯沖縄県本部の組織部長であった金洙燮に裴奉奇の存在を連絡したことがきっかけとなり、金賢玉夫妻は裴奉奇を訪ねて行き、裴奉奇と出会うこととなった<sup>18</sup>。

## 2. 金賢玉が語る裴奉奇の変化

裴奉奇はこの頃、沖縄県南東部の佐敷村（現・南城市）にあるサトウキビ畑にひっそりと立つ、窓のない二畳ほどの小屋に一人で暮らしていた<sup>19</sup>。生活は非常に貧

しく、ガスも水道もない小屋の中で、戦中・戦後に強いられた過酷な体験の影響と思われる極度の人間忌避症と止むことのない神経痛に苛まれた<sup>20</sup>。上記報道等を通じてその存在が周囲に知られた後は様々なメディアからの唐突な取材の影響で裴奉奇の体調はしばしば悪化し、金賢玉夫妻も裴奉奇から「何しに来た、気分悪い、帰れ!」と言われ面会を拒絶されたことが何度もあった<sup>21</sup>。

しかし金賢玉夫妻が粘り強く裴奉奇を訪ねる中で、裴奉奇は徐々に金賢玉夫妻に心を開くようになり、1976年頃には3人で一緒にドライブに出て観光や昼食をともにするまでになった。金賢玉夫妻が出会った頃の裴奉奇は朝鮮語を一切話さなかったが、この頃には朝鮮語で「고향사람이 좋다 (くにの人がいいねえ)。言葉も通じるし、気持ちも通じるから、やっぱりいいさあ」と話すようになっていた<sup>22</sup>。そのような関係性の中で裴奉奇は総聯の機関紙『朝鮮新報』の取材を受け自らの被害について詳細に語り、その内容が裴奉奇の実名と正面から撮影した全身写真とともに1977年4月23日付の同紙に掲載されるに至った<sup>23</sup>。



図2 『朝鮮新報』1977年4月23日。中央に裴奉奇の写真が掲載されている。

「友軍が負けて悔しい」としばしば話し、日本による朝鮮植民地支配からの解放や朝鮮半島の南北分断状況について知る機会もなく、日本軍による被害を受けたのはすべて自分の「運命」だと話す裴奉奇に対し、金賢玉夫妻は裴奉奇の被害は日帝による朝鮮植民地支配と侵略戦争によるものであること、朝鮮半島は解放後も南北分断を強いられ統一が果たされていないこと、総聯が在日朝鮮人の権利を

守るために日本で活動していることなどについて話した。裴奉奇は金賢玉夫妻の言葉を容易には信じようとしなかったが、金賢玉夫妻と共に米韓合同軍事演習への反対集会や反基地集会などに参加する中で、徐々に見識を深めていった<sup>24</sup>。

1988年、日本人の記者から故郷に行ってみないかと誘われた際、裴奉奇は途端に涙をぼろぼろと流しながら「行きたいけど、行けないさあ」「だって、向こうにも米軍基地があるじゃない」と述べ、生まれ故郷よりも長く住んだ沖縄にも故郷にも米軍基地があり、朝鮮半島は南北に分断されたままで故郷に帰ったとしてもどうすることも出来ない、朝鮮半島が統一して外国の軍隊が出て行ったときに帰るんだと言いながら泣いたという<sup>25</sup>。

1989年1月に裕仁天皇が死んだ際は、裴奉奇は「え、なぜね。謝りもせんと逝きよって」とこぼし、金賢玉夫妻が裕仁天皇に具体的に何をしてほしいかを尋ねると「謝ってほしいさ」と話した。その頃から裴奉奇は金賢玉夫妻にしきりに「원췌를 𪚩아달라 (かたきを討ってくれ)」と朝鮮語で話すようになり、金賢玉夫妻はかつて「友軍が負けて悔しい」と繰り返し話した裴奉奇がそのように話すのを聞いて「胸がいっぱいになった」<sup>26</sup>。

裴奉奇は1990年に朝鮮労働党・日本の自由民主党・日本社会党による三党共同宣言<sup>27</sup>が発表され朝日関係の正常化に向けて動き出したことを非常に喜び、「統一したら一緒に帰ろう」という言葉がいつしか金賢玉夫妻との合言葉になっていたという<sup>28</sup>。

翌年1991年10月、満77歳の年に裴奉奇は自宅で息を引き取った。金賢玉夫妻が総聯沖縄県本部として主催した追悼式には沖縄県知事や那覇市長からも供花が寄せられ、同年8月に名乗り出ていた金学順からも弔慰金が送られてきた<sup>29</sup>。追悼式が行われたのは同年12月6日、奇しくも金学順を含む韓国在住のサバイバーらが日本政府を相手に損害賠償を求めて初めて提訴したその日であった<sup>30</sup>。金賢玉はこの偶然を「裴奉奇ハルモニと南の方々とのパトタッチ」と表現した<sup>31</sup>。

### 3. 日韓両国における裴奉奇への認識の広がり「忘却」

裴奉奇の存在は上述した1975年10月の『高知新聞』等の報道や1977年4月の『朝鮮新報』の報道を機に知られ始め、1979年には裴奉奇のインタビュー映像をまとめた映画「沖縄のハルモニ 証言・従軍慰安婦」<sup>32</sup>の公開と日本各地で行われた巡回上映会を通じてより多くの人々に知られるところとなった。1980年代以降は『沖縄のハルモニ』『赤瓦の家』をはじめとする裴奉奇の証言を掲載した書籍

が複数出版され<sup>33</sup>、1991年には裴奉奇のインタビュー映像を含んだ映画「アリランのうた オキナワからの証言」<sup>34</sup>が日本各地で上映され全国で10万人以上を動員し<sup>35</sup>、その存在はより広く知られるようになった。

韓国では、上記「沖縄のハルモニ」の東京での上映会について紹介する形で、裴奉奇の名前や被害の概要、裴奉奇がうつむいて涙ぐむシーンのカット写真を掲載した記事が1979年に『東亜日報』や『京郷新聞』に掲載された<sup>36</sup>。翌年1980年11月には当時韓国の梨花女子大学教授であった尹貞玉<sup>ゆんじょんおつ</sup>が裴奉奇を初めて沖縄で取材し、その記事が裴奉奇の名前と顔写真とともに1981年9月の『韓国日報』に掲載された<sup>37</sup>。尹貞玉は1990年にも『ハンギョレ新聞』に裴奉奇の顔写真入りの記事を寄せており<sup>38</sup>、同記事を含む全4回の連載記事は韓国で日本軍性奴隷制問題についての世論を喚起する重要な契機となり、同年11月の「韓国挺身隊問題対策協議会」（以下、挺対協）<sup>39</sup>の結成へと繋がった。また、韓国の公共放送局であるKBSは同年に放映した「光復45周年特別企画 太平洋戦争の怨魂たち」の中で『赤瓦の家』と裴奉奇の略歴を紹介し、沖縄で裴奉奇への直接取材も試みている<sup>40</sup>。こうして韓国でも裴奉奇の存在が主に報道を通じて伝えられた。

しかし同年6月の日本の参議院予算委員会での日本軍「慰安婦」に関する本岡昭次参議院議員（当時）の質問に日本政府委員（労働省職業安定局長、当時）が「民間の業者がそうした方々を軍とともに連れて歩い」<sup>41</sup>たと答弁し、これに憤慨した金学順が「日本政府がウソを言うのがゆるせない。生き証人がここで証言をしているじゃないですか」<sup>42</sup>と翌年1991年8月に実名と顔を明かして名乗り出て、日本政府を提訴し、日本軍性奴隷制問題が韓国における大きな社会問題となっていく過程を経て、韓国ではその後、金学順が日本軍性奴隷制の被害を「最初」に告発したサバイバーとして語られるようになる。

金学順が1997年12月に死去した際、KBSは「自らが日本軍慰安婦であったことを最初に告白し、従軍被害女性の実状を暴露した73歳の金学順ハルモニが今朝未明、恨多き生を終えました」（傍点は筆者による。以下同じ）と報じ<sup>43</sup>、『ハンギョレ新聞』も「慰安婦初証言の金学順氏が逝去」の見出しで「自らが日本軍慰安婦であったことを初めて証言し慰安婦問題を歴史的懸案に引き上げた引き上げた金学順（73）ハルモニが…（中略）…他界した」と報じた<sup>44</sup>。『ハンギョレ新聞』はその後も2014年の記事で「1991年8月14日、故・金学順さんの歴史的な初証言が出て以降、慰安婦問題は日本の戦後責任を問う最大の破壊的イシューとして浮上した」と報じている<sup>45</sup>。

両媒体とも上述のとおり1990年に裴奉奇について報じているところ、仮に裴奉奇の存在を念頭に置きながら報じたのだとすれば「韓国で最初に告白し」「国内で初めて証言し」「歴史的な国内初証言」などの表現になるのが自然であると考えられる。しかし、いずれの報道もそのような表現になっておらず、当該報道の中で裴奉奇の存在に別途触れられてもいないことから、これらの報道において裴奉奇の存在は「忘却」されているといえる。

その後『ハンギョレ新聞』は2015年、裴奉奇を突如思い出したかのように「私たちが忘れた最初の慰安婦証言者…その名は裴奉奇」の見出しで一面に大きく裴奉奇の写真と金洙燮へのインタビューに基づく長文のルポルタージュ記事を掲載したが、同記事は韓国社会における裴奉奇の「忘却」を象徴的に表した記事といえる<sup>46</sup>。

日本でも、日本軍性奴隷制問題を大きく報じて世論喚起に重要な役割を果たした『朝日新聞』は、やはり金学順が死去した際に金学順を「韓国人女性として初めて実名を明かした」<sup>47</sup>と報じ、翌年にも「韓国の金学順さん（昨年十二月、七十三歳で死去）が、慰安婦制度の被害者として初めて名乗り出たのは一九九一年夏だった」<sup>48</sup>と報じており、裴奉奇の存在を「消去」してしまっている。

また、アジア各国のサバイバーと支援団体らが日本軍性奴隷制問題の解決を目指して2012年12月に開催した「第11回日本軍「慰安婦」問題解決のためのアジア連帯会議」では、金学順が名乗り出た8月14日を「日本軍「慰安婦」メモリアル・デー」とすることが決定され、その後は同日に市民団体によるイベントが日本各地で行われているところ、その案内文では「8月14日は、1991年に韓国の金学順さんが日本軍「慰安婦」被害者として初めて名乗り出た日です」<sup>49</sup>「1991年8月14日、韓国の「慰安婦」被害者、金学順さんが半世紀の沈黙を破って、自らが日本軍「慰安婦」とされたことを告白しました。…（中略）…私たちは、最初に名乗り出た金学順さんの勇気と思いを忘れないために、この8月14日を8.14日本軍「慰安婦」メモリアル・デーとしています」<sup>50</sup>などと記載され、やはり金学順以前に被害を告発した裴奉奇の存在を「消去」してしまっている。

こうした言説をみると、日本においても韓国と同様に、上記1990年6月の日本政府の国会答弁に憤った金学順の名乗り出、金学順らサバイバーによる日本政府への提訴、吉見義明による日本軍の関与を示す公文書の発見、宮沢喜一日本総理（当時）訪韓時の盧泰愚<sup>のとう</sup>韓国大統領（当時）による日本軍性奴隷制問題に関する日本政府の謝罪と補償の要求、加藤紘一官房長官（当時）談話の発表<sup>51</sup>、河野洋平官

房長官（当時）談話の発表<sup>52</sup>、金学順らサバイバーの相次ぐ来日と証言集会の開催、問題解決を目指す様々な市民運動の盛り上がり、これら一連の動きについてのマスメディア報道などを通じた日本軍性奴隷制問題の社会問題化の大きなうねりの中で、裴奉奇の存在は遠景に去り、金学順が日本軍性奴隷制問題を象徴するシンボリックなサバイバーとして「最初」に名乗り出たという認識が、報道や市民運動の言説を通じて社会的に定着していったものといえる。

#### 4. 日本の継続する植民地主義・南北分断体制の狭間で等閑視される裴奉奇の告発

沖縄の朝鮮人史を研究する金美恵<sup>きみみ</sup>は、韓国における裴奉奇の「忘却」状況と関連して、1999年に渡嘉敷島を訪問した際にナムムの家<sup>53</sup>の僧侶から、裴奉奇が韓国でほとんど知られていないのは裴奉奇を支援していたのが「朝鮮総聯の人々」だからと聞いたというエピソードを紹介しながら、裴奉奇の「1977年の告発が、ほかでもない総聯の機関紙である『朝鮮新報』の紙面だったこと、そして裴奉奇さんの世話人となっているのが総聯の活動家だということが「朝鮮総聯の支援を受けている」ということになり、そのことが問題の核心だったのだ」<sup>54</sup>と指摘した。さらに軍事独裁政権下で反共主義が猛威をふるっていた1970年代の韓国では「朝鮮総連」＝「北朝鮮」であり「アカ」の集団とされてきた。南北のイデオロギー対立が厳しい時代に、南北分断の政治的対立とその矛盾が、植民地支配と戦争の被害者であった裴奉奇さんを黙殺した」としながら、強固な家長長制イデオロギー下でサバイバーが沈黙を強いられていた韓国の当時の時代背景も考慮しつつ、裴奉奇は「植民地支配の犠牲者」「国家的に組織された性暴力の犠牲者」、そして「南北分断体制の犠牲者」として、まさに重層的な矛盾の被害者だった」と指摘した<sup>55</sup>。

こうした金美恵の指摘に、先述した日韓双方における裴奉奇の「忘却」ないし「消去」の過程からみえてくる点を付け加えるならば、裴奉奇は「民間の業者がそうした方々を軍とともに連れて歩いた」などの日本軍性奴隷制の加害責任を否定する日本政府の植民地主義的な姿勢に端を発した日本軍性奴隷制問題の社会問題化の中で「忘却」ないし「消去」されてしまった「日本の継続する植民地主義の被害者」でもあると位置づけることができるだろう。

さらに述べると、2015年以降の4.23アクションの影響<sup>56</sup>や先述した2015年8月の『ハンギョレ新聞』報道の影響もあってか、近年韓国では金学順の1991年の証言を「最初の公開証言」であるとする説明が主になっているとみられ、裴奉奇

の証言も消去せずに記憶していこうとする動きもみられる<sup>57</sup>。たとえば「日本軍性奴隷制問題解決のための正義記憶連帯」（以下、正義連）の運営する「日本軍性奴隷制問題を記憶し連帯するための戦争と女性人権アーカイブ」では金学順は「日本軍「慰安婦」サバイバーであり最初の公開証言者」と紹介されている一方、裴奉奇は「日本軍「慰安婦」サバイバーであり最初の証言者」と紹介されている<sup>58</sup>。

両者の違いは「公開証言」であるか否かにあるところ、金学順の1991年の証言は本人が望んで行った自発的な証言である一方、裴奉奇の初証言は1975年の『高知新聞』などを通じた「強制された」カムアウト<sup>59</sup>ともいえる非自発的な証言であった点を考慮して表現を区別しているものと考えられる。

しかし「公開証言」であるか否かを「自発的な証言か／非自発的な証言か」で区別するのであれば、1977年の裴奉奇による『朝鮮新報』紙面上での実名と顔を明かしての自発的な証言は明らかに「公開証言」であるといえる。しかし、韓国において裴奉奇の同証言の存在やその意義について考察するものは少なく<sup>60</sup>、今なおその存在が等閑視されているといえる。

こうした状況には総聯の機関紙である『朝鮮新報』へのアクセスが韓国の法律によって厳しく制限されている事情も関係していると考えられる<sup>61</sup>。もっとも、1977年の裴奉奇の証言記事の存在や4.23アクションの由来が同証言記事にあることは度々報じられており<sup>62</sup>、韓国女性家族部（当時）傘下の韓国女性人権振興院の所属機関である「日本軍「慰安婦」問題研究所」の公式ウェブサイトに筆者が寄稿した記事上でも読むことができる<sup>63</sup>。しかしながら現在も韓国の日本軍性奴隷制問題に関する主要な言説において裴奉奇の『朝鮮新報』紙面上での「公開証言」の存在が等閑視されている状況は、裴奉奇がまさに現在も「南北分断体制の犠牲者」であり続けていることを示している。

## 5. おわりに

本稿で述べた日韓双方における裴奉奇の「忘却」「消去」ないし1977年の裴奉奇による自発的な証言の等閑視が続く限り、裴奉奇の同告発の意義は日本の継続する植民地主義と南北分断体制の交錯の深淵に沈んでしまう。その意味で、1977年4月23日の裴奉奇の自発的な証言を積極的に記憶し、日本軍性奴隷制の歴史を否定する動きに反対し日本軍性奴隷制問題の克服と朝鮮半島の統一を志向する4.23アクションは、裴奉奇の同告発をその深淵から掬い上げることで日本の継続する植民地主義と南北分断体制に異議申し立てを行い、その克服を目指す社会運

動として一定の意義を持つといえよう。具体的な 4.23 アクションの事例整理と分析・評価については今後の研究課題としたい。

〈註〉

- 1 日本外務省「日韓外相会談」[https://www.mofa.go.jp/mofaj/a\\_o/na/kr/page4\\_001667.html](https://www.mofa.go.jp/mofaj/a_o/na/kr/page4_001667.html)（最終閲覧日：2025年9月26日）。
- 2 日本の旧陸軍・海軍が日本敗戦までの期間に戦地・占領地で「慰安所」を作り、主にアジアの女性たちを日本の軍人・軍属の性奴隷としたシステム。同制度に伴い「慰安所」以外の場所でも日本の軍人らが占領地の女性をレイプする性暴力が頻発した。
- 3 「慰安婦問題についての我が国の取組」日本国外務省ウェブサイト、[https://www.mofa.go.jp/mofaj/a\\_o/rp/page25\\_001910.html](https://www.mofa.go.jp/mofaj/a_o/rp/page25_001910.html)（最終閲覧日：2025年9月26日）。
- 4 国連文書 CEDAW/C/JPN/CO/7-8、パラ 28、CERD/C/JPN/CO/10-11、パラ 28、E/C.12/JPN/CO/3、パラ 26、CCPR/C/JPN/CO/6、パラ 14、CAT/C/JPN/CO/2、パラ 19、AL JPN 4/2025 など。
- 5 植民地時代に行われた人権および国際人道法に対する重大な違反行為の遺産に対処するための移行期正義の措置については国連文書 A/76/180などを参照。
- 6 本稿では、社会・経済・文化・政治などの様々な領域で植民地主義的な権力関係・差別構造が再生産され続けている状況・状態を指して「継続する植民地主義」と記す。日本における継続する植民地主義の問題については岩崎稔ほか『継続する植民地主義 ジェンダー／民族／人種／階級』青弓社、2005年、中野敏男ほか『沖縄の占領と日本の復興 植民地主義はいかに継続したか』青弓社、2006年、宋連玉『脱帝国のフェミニズムを求めて』有志舎、2009年、金富子『継続する植民地主義とジェンダー「国民」概念・女性の身体・記憶と責任』世織書房、2011年、宋連玉『フェミニズムの視点からの在日朝鮮人史 植民地主義・家父長制・性差別』一聡舎、2025年などを参照。
- 7 朴金優綺「〈日本軍の否定を許さない 4.23 アクション〉の始まりと 10 年の軌跡」在日本朝鮮人人権協会「人権と生活」60号、在日本朝鮮人人権協会、2025年、同「裴奉奇さんを記憶する——朝鮮半島の分断を超えて」『インターセクショナルリティで語る植民地支配と侵略戦争』あけび書房、2025年を参照。なお、筆者は 4.23 アクションを主催する在日本朝鮮人人権協会性差別撤廃部会の事務局スタッフを務めている。
- 8 裴奉奇の姓の漢字表記について筆者はかつて「裴」の字を使用していたが、その後裴奉奇の姓の漢字表記を推認させる裴奉奇の在留資格証明書に「裴」と記されていたことが分かったことから、現在は「裴」を使用している。
- 9 日本人サバイバーの城田すず子は裴奉奇に先立って自身の被害について『マリヤの賛歌』（日本基督教出版局、1971年）を通して告発しているが、実名を明かさず仮名で名乗り出ている。日本人サバイバーをめぐる問題については「戦争と女性への暴力」リサーチ・アクション・センター『日本人「慰安婦」』現代書館、2015年などを参照。
- 10 前掲朴金「〈日本軍の否定を許さない 4.23 アクション〉の始まりと 10 年の軌跡」、32 頁、在日本朝鮮人人権協会性差別撤廃部会『4.23 アクション映画祭～日本軍性奴隷制サバイバーと出会う～記録集』在日本朝鮮人人権協会性差別撤廃部会、2023年、4 頁。

- 11 川田文子『赤瓦の家』筑摩書房、1987年、13-97頁、山谷哲夫『沖縄のハルモニ』晩聲社、1980年、32-121頁。
- 12 前掲川田 98-112頁。前掲山谷 32-121頁。
- 13 金美恵「沖縄のなかの朝鮮人（下）」朝鮮新報社『月刊イオ』2013年11月号、66頁、「ハルモニの遺言・元「従軍慰安婦慰安婦」ペ・ボンギさんの戦後（3）／漂流」『琉球新報』1998年6月20日付。
- 14 「30年ぶり『自由』を手」戦時中、沖縄に連行の韓国女性 不幸な過去を考慮 法務省 特別在留を許可」『高知新聞』1975年10月22日付。同記事は共同通信社の配信によるもので、同じ内容が『琉球新報』『沖縄タイムス』同日記事にも掲載されている。
- 15 金優綺「インタビュー・金賢玉さんに聞く 日本軍「慰安婦」問題解決と統一への思いを胸に——裴奉奇ハルモニと過ごした一七年間を振り返る」在日本朝鮮人人権協会『人権と生活』35号、在日本朝鮮人人権協会、2012年、37頁。同記事は右記リンクから全文閲覧可。http://k-jinken.net/?p=1400（最終閲覧日：2025年9月26日）。前掲金「沖縄のなかの朝鮮人（下）」67頁。なお、金珠燮は2019年9月に沖縄で他界し故人となった。
- 16 1972年の日本への沖縄施政権返還を契機として、沖縄戦における朝鮮人に対する虐待・虐殺の実態と真相を調査した。同調査団は尾崎陸弁護士を団長として8名（朝鮮人・日本人各4名）で結成され、同年8月15日から9月6日にかけて調査活動を行った。その成果は同年10月に『第二次大戦時沖縄朝鮮人強制連行虐待調査団報告書』として発表されている。
- 17 前掲金美恵 67頁。
- 18 前掲金美恵 66-67頁、前掲金優綺 37頁、在日本朝鮮人人権協会性差別撤廃部会「沖縄の総聯活動家として裴奉奇さんに出会って【証言編】」https://www.youtube.com/watch?v=7dEFkXSLhs&t=7s（最終閲覧日：2025年12月14日）。
- 19 前掲川田 7-12頁、前掲金優綺 37頁。
- 20 前掲川田 111頁、前掲在日本朝鮮人人権協会性差別撤廃部会 70頁。
- 21 前掲金優綺 38-39頁、前掲在日本朝鮮人人権協会性差別撤廃部会 69頁。
- 22 前掲金優綺 38-39頁、在日本朝鮮人人権協会性差別撤廃部会「沖縄の総聯活動家として裴奉奇さんに出会って【ゆかりの地訪問編】」https://www.youtube.com/watch?v=t89kqj6HaMM&t=161s（最終閲覧日：2025年12月14日）。
- 23 「일제시기 오기나와에 끌려온 한 할머니의 피의 고발（日帝時期 沖縄に連れて来られた一人のハルモニの血の告発）」『朝鮮新報』1977年4月23日付。
- 24 前掲金優綺 39-40頁、前掲在日本朝鮮人人権協会性差別撤廃部会 69-70頁、前掲在日本朝鮮人人権協会性差別撤廃部会「沖縄の総聯活動家として裴奉奇さんに出会って【ゆかりの地訪問編】」。
- 25 前掲金優綺 42頁、前掲前掲在日本朝鮮人人権協会性差別撤廃部会「沖縄の総聯活動家として裴奉奇さんに出会って【証言編】」。
- 26 前掲金優綺 42頁、前掲在日本朝鮮人人権協会性差別撤廃部会 73-74頁、前掲在日本朝鮮人人権協会性差別撤廃部会「沖縄の総聯活動家として裴奉奇さんに出会って【証言編】」。
- 27 「日朝関係に関する日本の自由民主党、日本社会党、朝鮮労働党の共同宣言」。金丸信を団長とする自由民主党代表団、田辺誠を団長とする日本社会党代表団、金容淳を団長とする朝鮮労働党代表団間で行われた三党共同会談の結果、1990年9月28日に調印された。朝鮮民主主義人民共和国に対する日本の公式謝罪と償い、朝日間の国交関係樹立、在日朝鮮人の人権と民族的諸権利、法的地位の保障などについて盛り込まれ、その後の朝日国交正常化交渉開始のきっかけとなった。

- 28 前掲金優綺 43 頁、前掲在日本朝鮮人人権協会性差別撤廃部会 71 頁。
- 29 前掲金優綺 43 頁、前掲在日本朝鮮人人権協会性差別撤廃部会 74-76 頁。
- 30 アジア太平洋戦争韓国人犠牲者補償請求事件、事件番号平成 15 (オ) 1895。https://www.courts.go.jp/hanrei/62563/detail2/index.html (最終閲覧日: 2025 年 12 月 10 日)。
- 31 前掲金優綺 43 頁、前掲在日本朝鮮人人権協会性差別撤廃部会「沖縄の総聯活動家として裴奉奇さんに出会って【証言編】」。「ハルモニ」とは朝鮮語で「おばあさん」の意。なお、金賢玉は 2024 年 7 月に沖縄で他界し故人となった。
- 32 「沖縄のハルモニ 証言・従軍慰安婦」監督: 山谷哲夫、無明舎、1979 年。
- 33 前掲山谷、金一勉『日本女性哀史: 遊女・女郎・からゆき・慰安婦の系譜』現代史出版会、1980 年、前掲川田、川田文子『イアンフとよばれた戦場の少女』高文研、2005 年、アクティブ・ミュージアム「わたしの戦争と平和資料館」編『証言未来への記憶 2 アジア「慰安婦」証言集 南・北・在日コリア編 下』明石書店、2010 年、呉世宗『沖縄と朝鮮のはざままで 朝鮮人の〈可視化/不可視化〉をめぐる歴史と語り』明石書店、2019 年など。
- 34 「アリランのうた オキナワからの証言」監督: 朴壽南、「アリランのうた」製作委員会、1991 年。
- 35 「デジタル復元版「アリランのうた-オキナワからの証言」DVD」https://airrang.shopsselect.net/items/19645925 (最終閲覧日: 2025 年 12 月 14 日)。
- 36 「日社会に「挺身隊」충격 기록영화「오키나와의 할머니」순회上映中(日本社会に「挺身隊」衝擊 記録映画「沖縄のハルモニ」巡回上映中)』『東亜日報』1979 年 9 月 21 日付、「日서 話題 卍인 記録映畫「오키나와의 할머니」報答없는 "慰安"을 告發한다(日本で話題の記録映画「沖縄のハルモニ」報いのない“慰安”を告発する)』『京郷新聞』1979 年 9 月 28 日付。両記事を教えてくださいました河かおるさんに感謝します。
- 37 「끌려간 사람들 <8> 裴奉奇할머니 (連れて行かれた人々 <8> 裴奉奇ハルモニ)』『韓国日報』1981 年 9 月 3 日付。同記事を提供くださった洪玗仲さんに感謝します。
- 38 「이화여대 윤정옥 교수 '정신대' 원혼 서린 발자취 취재기 2 오키나와 (梨花女大 尹貞玉教授「挺身隊」怨魂が宿る足跡 取材記 2 沖縄)』『ハンギョ레新聞』1990 年 1 月 12 日付。
- 39 韓国教会女性連合会、韓国女性団体連合会など 37 の女性団体の参加のもと 1990 年 11 月 16 日に結成された日本軍性奴隷制問題解決を目指す団体。尹貞玉が初代共同代表を務めた。対協はその後 2018 年に韓国の「日本軍性奴隷制問題解決のための正義記憶財団」と統合し「日本軍性奴隷制問題解決のための正義記憶連帯」として活動している。
- 40 KBS ニュース「光復 45 周年 특별기획 태평양전쟁의 원혼들 제 2 편 침묵의 恨 (光復 45 周年 特別企画 太平洋戦争の怨魂たち 第 2 編 沈黙の恨)」https://www.youtube.com/watch?v=ajf31D886Qg (最終閲覧日: 2025 年 12 月 14 日)。
- 41 国会会議録「第 118 回国会 参議院 予算委員会 第 19 号 平成 2 年 6 月 6 日」https://kokkai.ndl.go.jp/#/detail?minId=111815261X01919900606&current=2 (最終閲覧日: 2025 年 12 月 14 日)。
- 42 「元従軍慰安婦・金学順さん(手紙 女たちの太平洋戦争)【大阪】『朝日新聞』大阪朝刊、1991 年 12 月 25 日付。
- 43 KBS ニュース「한의 세월 마감; 최초로 중군위안부 고백한 김학순 할머니 사망(恨の歳月に暮: 初めて従軍慰安婦であることを告白した金学順さん死去)」1997 年 12 月 16 日、https://news.kbs.co.kr/news/pc/view/view.do?ncd=3780997 (最終閲覧日: 2025 年 12 月 12 日)。
- 44 「위안부 최초증인 김학순씨 별세 일본 공식사죄 촉구 앞장 (慰安婦初証言の金学順氏が逝去 日

- 本の公式謝罪を求め続けた先駆者)『ハンギョレ新聞』1997年12月17日付。
- 45 「증언 부정하던 일본 정부, 2년 뒤 ‘고노담화’로 사과 (証言を否定していた日本政府、2年後に『河野談話』で謝罪)』『ハンギョレ新聞』電子記事、<https://www.hani.co.kr/arti/international/japan/643401.html> (最終閲覧日: 2025年12月14日)。
  - 46 「우리가 잊어버린 위안부 최초의 증언자…그 이름, 배봉기 (私たちが忘れた最初の慰安婦証言者…その名は裴奉奇)』『ハンギョレ新聞』2015年8月8日付。なお同記事は、同新聞のキル・ユンヒョン東京特派員(当時)が2015年4月23日に参議院議員会館前で行われた4.23アクションに参加したことで裴奉奇を知り、筆者による記事(前掲金優綺「インタビュー・金賢玉さんに聞く」)を筆者から渡されて読んだことが契機となった。
  - 47 「金学順さん死去 従軍慰安婦の体験、実名証言」『朝日新聞』1997年12月16日付。
  - 48 「女性NGOが原動力に 加害者の責任問う動き 戦争下の性暴力」『朝日新聞』1998年7月27日付。
  - 49 「8.14日本軍「慰安婦」メモリアル・デー 連帯の気持ちを写真で伝えませんか?」案内文(呼びかけ: 日本軍「慰安婦」問題解決全国行動)。アクティブ・ミュージアム女たちの戦争と平和資料館ウェブサイト、<https://wam-peace.org/ianfu-topics/3190/> (最終閲覧日: 2025年12月14日)。
  - 50 「第5回8.14日本軍「慰安婦」メモリアル・デー in 大阪・東京 語り始めた被害者たち」案内文(2017年8月12-13日)。共催: 日本軍「慰安婦」問題解決全国行動・戦時性暴力問題連絡協議会・日本軍「慰安婦」問題・関西ネットワーク、<https://qr.paps.jp/ZzKwA> (最終閲覧日: 2025年12月14日)。
  - 51 「朝鮮半島出身のいわゆる従軍慰安婦問題に関する官房長官談話」1992年7月6日。「慰安所」の設置等につき日本政府の関与を認めた。
  - 52 「慰安婦関係調査結果発表に関する官房長官談話」1993年8月4日。「慰安所」の設置、管理及び「慰安婦」の移送への日本軍の直接・間接の関与、「慰安婦」の募集が本人たちの意思に反して行われたことなどを認めた。
  - 53 1992年10月に韓国・ソウルに開館したサバイバーのための住居福祉施設。1995年に京畿道廣州市に移転。
  - 54 金美恵「沖縄のなかの朝鮮人(上)」朝鮮新報社『月刊イオ』2013年10月号、67頁。
  - 55 同上、김미혜 「오키나와의 조선인: 배봉기 씨의 ‘자기증명’의 이중적 의미 중심으로」이정은・조경희 (편) 『‘나’를 증명하기: 아시아에서의 국적·여권·등록』 파주: 한울엠플러스, 2017년, 151쪽, 179쪽も参照。
  - 56 韓国でも4.23アクションについての認知は広がっている。たとえば後述する「日本軍性奴隷制問題を記憶し連帯するための戦争と女性人権アーカイブ」の裴奉奇の説明文には「2015年4月23日、裴奉奇を記憶する「日本軍性奴隷制の否定を許さない4.23アクション: 裴奉奇ハルモニを記憶して」が開催された」と書かれている。日本軍性奴隷制問題を記憶し連帯するための戦争と女性人権アーカイブ、<https://archives.womenandwar.net/items/show/416> (最終閲覧日: 2025年12月15日)。また4.23アクションに関する近年の報道としては「위안부 최초 증언 배봉기 할머니 기억 ‘4·23 행동’ 10년째 합성 ‘일 정부 사과’ (「慰安婦初証言の裴奉奇さんを記憶「4・23アクション」10年目の呼び「日本政府は謝罪を」)』『ハンギョレ新聞』2025年4月24日付などがある。
  - 57 例として2019年にはソウルで裴奉奇に関する展示会が開かれ(“기록, 기억: 일본군 ‘위안부’ 이야기 다 듣지 못한 말들”(「記録、記憶: 日本軍「慰安婦」の物語 聞き尽くされていない言葉」))、2024年には市民団体「배봉기의 평화 (裴奉奇の平和)」が発足し活動している。また、日本でも「希望のたね基金」が2023年に裴奉奇を象徴する花としてアザミを選定した。
  - 58 日本軍性奴隷制問題を記憶し連帯するための戦争と女性人権アーカイブ、<https://archives>。

womenandwar.net/items/show/415 及 び <https://archives.womenandwar.net/items/show/416> (最終閲覧日: 2025年12月15日)。同アーカイブでの説明文の違いについて教えてくれた崔藝隣さんに感謝します。金学順の1991年の証言を「公開証言」と説明する他の例として「金福童の希望」ウェブサイト、<https://kimbokdong.com/4368?> (最終閲覧日: 2025年12月18日)、韓国民族文化大百科事典の「金学順」項目、<https://encykorea.aks.ac.kr/Article/E0079000> (最終閲覧日: 2025年12月18日) など。

- 59 前掲金「沖縄のなかの朝鮮人(上)」67頁、前掲김미혜 150쪽。
- 60 禹準河は裴奉奇の同証言について、発話の構造に着目しながら「朝鮮総聯の政治的言説と被害者像に符合する方式で選別され再構成された」と批判的に評価している。우준하 「일본군 '위안부' 최초 증언자배봉기의 기억과 증언 연구 - 전후 오키나와에서 대항 기억과 주체화 과정을 중심으로」성공회대학교 일반대학원석사학위논문, 2025년, 57쪽.
- 61 韓国では『朝鮮新報』ウェブサイトは「放送メディア通信委員会の設置及び運営に関する法律」第22条第4号及び第26条第1項により「有害サイト」に指定されたサイトとしてアクセスが制限されている。
- 62 前掲『ハンギョレ新聞』2015年8月8日付、[「특파원 칼럼」 캐럴멜 / 조기원 (特派員コラム) キャラメル / チョ・ギウォン)』『ハンギョレ新聞』2018年5月10日配信、<http://www.hani.co.kr/arti/opinion/column/844140.html> (最終閲覧日: 2018年5月10日)、前掲『ハンギョレ新聞』2025年4月24日付。
- 63 박김우기 (朴金優綺) 「배봉기 할머니를 기억하다 - 조선반도의 분단을 넘어서 (裴奉奇さんを記憶する——朝鮮半島の分断を超えて)」2019年3月9日掲載、[https://kyeol.kr/ko/boards/bd\\_look\\_person/118](https://kyeol.kr/ko/boards/bd_look_person/118) (最終閲覧日: 2025年12月17日)。

## 主要参考文献

### I 新聞・報道記事

- ・「30年ぶり『自由』を手にした戦時中、沖縄に連行の韓国女性 不幸な過去を考慮 法務省 特別在留を許可」『高知新聞』1975年10月22日付
- ・「元従軍慰安婦・金学順さん(手紙 女たちの太平洋戦争)【大阪】」『朝日新聞』大阪朝刊、1991年12月25日付
- ・「金学順さん死去 従軍慰安婦の体験、実名証言」『朝日新聞』1997年12月16日付
- ・「女性NGOが原動力に 加害者の責任問う動き 戦争下の性暴力」『朝日新聞』1998年7月27日付
- ・「일제시기 오키나와에 끌려온 한 할머니의 피의 고발」『朝鮮新報』1977年4月23日付
- ・「끌려간 사람들 <8> 裴奉奇할머니」『韓国日報』1981年9月3日付
- ・「이화여대 윤정옥 교수 '정신대' 원혼 서린 발자취 취재기 2 오키나와」『ハンギョレ新聞』1990年1月12日付
- ・KBS 뉴스 「한의 세월 마감; 최초로 종군위안부 고백한 김학순 할머니 사망」1997年12月16日
- ・「위안부 최초증언 김학순씨 별세 일본 공식사죄 촉구 앞장」『ハンギョレ新聞』1997年12月17日付
- ・「우리가 잊어버린 위안부 최초의 증언자...그 이름, 배봉기」『ハンギョレ新聞』2015年8月8日付

### II 論考・論文・書籍

- ・川田文子『赤瓦の家』筑摩書房、1987年

- ・ —— 『イアンフとよばれた戦場の少女』 高文研、2005年
- ・ 山谷哲夫 『沖繩のハルモニ 大日本売春史』 晩聲社、1980年
- ・ 金美恵 「沖繩のなかの朝鮮人 (上)」 朝鮮新報社 『月刊イオ』 2013年10月号
- ・ —— 「沖繩のなかの朝鮮人 (下)」 朝鮮新報社 『月刊イオ』 2013年11月号
- ・ 金優綺 「インタビュー・金賢玉さんに聞く 日本軍「慰安婦」問題解決と統一への思いを胸に —— 裴奉奇ハルモニと過ごした一七年間を振り返る」 在日本朝鮮人人権協会 『人権と生活』 35号 (在日本朝鮮人人権協会、2012年)、36-45頁。
- ・ 朴金優綺 「〈日本軍の否定を許さない4.23アクション〉の始まりと10年の軌跡」 在日本朝鮮人人権協会 『人権と生活』 60号 (在日本朝鮮人人権協会、2025年)、30-34頁。
- ・ 在日本朝鮮人人権協会性差別撤廃部会 『4.23アクション映画祭～日本軍性奴隷制サバイバーと出会う～記録集』 在日本朝鮮人人権協会性差別撤廃部会、2023年
- ・ 吳世宗 『沖繩と朝鮮のはざままで 朝鮮人の〈可視化／不可視化〉をめぐる歴史と語り』 明石書店、2019年
- ・ 김미혜 「오키나와의 조선인: 배봉기 씨의 '자기증명' 의 이중적 의미를 중심으로」 이정은·조경희 (편) 『'나' 를 증명하기: 아시아에서의 국적·여권·등록』 파주: 한울엠플러스, 2017년, 145-179쪽
- ・ 임경화 「마이너리티의 역사기록운동과 오키나와의 일본군 '위안부'」 『大東文化研究』 112권, 2020, 491-520쪽
- ・ 김현경 「냉전과 일본군 '위안부': 배봉기의 잊혀진 삶 그리고 주검을 둘러싼 경합」 『한국여성학』 제 37권 2호, 2021년, 203-236쪽
- ・ 우준하 「일본군 '위안부' 최초 증언자배봉기의 기억과 증언 연구 - 전후 오키나와에서 대항 기억과 주체화 과정을 중심으로」 성공회대학교 일반대학원석사학위논문, 2025년